

# 破られた並行世界

---

## 第1章: 揺れる都市

高橋さくらは、東京に住む普通の若いOLだった。毎日、満員電車で揺られ、コーヒーを片手に仕事をこなし、夜遅くまで残業する日々を過ごしていた。だが、その特定の午後、空気がどこか重く、電気が走るような緊張感が漂っていた。

さくらが渋谷のスクランブル交差点を歩いているとき、それは突然起こった。足元が微かに揺れ始め、それがすぐに激しい地震に変わった。「地震だ！地震だ！」という悲鳴が四方八方から聞こえ、周囲はパニックに陥った。さくらは立ち尽くし、高層ビルが風に揺れる葦のように揺れるのをただ見つめていた。

その中の一つ、巨大なガラスとスチールのビルが、ゆっくりとさくらに向かって倒れてきた。逃げようとする気力も湧かない。ただ、目の前の現実を受け入れるしかなかった。

「こういうものなのか。」心の中でそう呟き、静かな諦めが訪れる。

そして、その瞬間、すべてが止まった。

地震も、ビルの崩壊も、時間そのものが凍りついたように。

世界が激しく渦巻き、さくらは目を閉じた。頭を抱え、立ってられないほどの感覚に襲われる。そして、目を開けたとき、彼女はまだ渋谷の交差点に立っていた。しかし、何かが明らかに違っていた。

---

## 第2章: 見知らぬ東京

先ほどの混乱は完全に消えていた。街は不気味なほど静かだった。つい数分前に崩壊していたはずのビル群は、傷一つない完璧な姿でそびえ立っている。周囲にあるネオン看板も輝きを放っていたが、そこに映るブランドはどれも見覚えのないものばかりだった。交差点を行き交う人々は秩序だって動き、誰一人として不安や混乱の表情を見せていない。

さくらの胸が高鳴る。「これは一体...？」

慌ててスマホを取り出し、母親に電話をかけた。だが、応答はない。友人や同僚にも連絡を試みたが、誰一人として電話に出ない。まるで、彼女が知る世界そのものが消えてしまったかのようだった。

不安と恐怖に駆られたさくらは、家に戻ることにした。だが、自分のアパートにたどり着き、ドアをノックすると、見知らぬ男がそこにいた。

その男は背が高く、鋭い顔立ちをしていた。「どうしましたか? 」と、少し驚いたように尋ねる。

「ここは私のアパートです! 」とさくらは叫んだ。声は震えていた。

男は眉をひそめた。「それはおかしいですね。私はここに生まれてから住んでいます。名前は竹田太郎です。」

さくらは信じられない思いで彼を見つめた。「嘘だ...ここは、私が三年間住んでいる家なんです。」

太郎は少し同情するような目で彼女を見た。「何かあったんですね。中に入って話しましょう。」

---

### 第3章: 地震のない世界

太郎のリビングでコーヒーを飲みながら、さくらは自分の身に起きたことを説明した。太郎は静かに話を聞き、時折頷くものの、どこか信じられない様子だった。

「信じてもらえないかもしれませんが、私は別の世界から来たと思うんです。」さくらの声には焦りがにじんでいた。

太郎は椅子にもたれかかり、考え込むように言った。「それほどおかしな話ではないかもしれませんが。ここは、あなたが知っている東京とは違うようです。」

彼は続けた。「1965年、この世界では地震が完全に消えました。ある日本人科学者、中村英夫博士が、地震を防ぐ技術を発明したんです。彼は地震の原因である地下のエネルギーを海洋に転送する方法を発見しました。その結果、日本本土では地震が発生しなくなりました。」

「そんなこと、信じられない...」さくらは呟いた。「日本に地震がないなんて...」

「ここでは、それが当たり前なんです。」太郎は窓の外を指さした。

さくらが外を見ると、目に飛び込んできたのは見たこともない未来の景色だった。空を飛ぶ車、街中にあるロボット、そして雲を突き抜けるほど高いビル群。まるで SF 映画の中に迷い込んだような感覚だった。

「ここは私の世界じゃない...」さくらは呟いた。「元の世界に戻りたい。」

太郎は困った顔をして言った。「それは簡単なことじゃないと思います。」

---

## 第 4 章: 中村博士の技術とその遺産

太郎は、さくらを助けるために「中村研究所」を訪れることを提案した。そこは、中村博士の遺産を引き継いだ科学者たちが最先端の研究を行う施設だった。

研究所で彼らを迎えたのは、AI ホログラムだった。それに案内され、さくらは研究者の黒田あゆみ博士と対面する。

黒田博士はさくらの話をじっと聞き、考え込んだ後に言った。「もし本当に並行世界から来たのなら、地震エネルギーとこの世界の技術が何らかの形で干渉し、次元の裂け目を生じさせた可能性があります。」

「元の世界に戻ることはできますか？」さくらは切実に尋ねた。

黒田博士は眉をひそめた。「理論的には可能です。ただし、非常に危険です。」

「それでも戻りたいんです。」さくらの声には決意が込められていた。

---

## 第 5 章: 帰還

数日間、黒田博士とそのチームは実験の準備を進めた。巨大な装置が組み立てられ、さくらはその中心に立つことになった。装置が動き始めると、地面が震え、空気がピリピリとした感覚を伴った。

再び世界が渦を巻く感覚。目を閉じ、さくらはその瞬間を待った。

目を開けると、彼女は渋谷の交差点に倒れ込んでいた。周囲は再び混乱に包まれていた。救急車のサイレン、人々の叫び声—そこは間違いなく、彼女が知る東京だった。

涙が頬を伝う。やっと、帰ってきたのだ。

---

## エピローグ

その後、さくらは元の生活に戻ろうとしたが、あのもう一つの東京の記憶が頭を離れなかった。あちらの世界では、地震は過去のものだった。だが、その完璧さの裏に潜む代償を忘れることはできなかった。

ある晩、帰り道で微かな地震を感じたとき、さくらは微笑んだ。

「不完全な世界も、悪くない。」